

批判理論と会計理論：ロツホリンによる ハーバマス理論の適用(1)

NAGANO, Norio / 永野, 則雄

(出版者 / Publisher)

法政大学経営学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei journal of business / 経営志林

(巻 / Volume)

32

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

41

(終了ページ / End Page)

49

(発行年 / Year)

1995-07-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003421>

批判理論と会計理論(1)

— ロッホリンによるハーバマス理論の適用 —

永野 則雄

目 次

- 1 はじめに
- 2 批判理論の位置付け
- 3 機能主義に対する批判(以上, 今号)
- 4 ハーバマス方法論の展開(以下, 次号予定)
- 5 会計と組織との関係の分析
- 6 おわりに

1 はじめに

イギリスのシェフィールド大学のロッホリン(Richard Laughlin)¹⁾は、その地においては、ユルゲン・ハーバマスの批判理論を会計理論に適用していることで知られている。ハーバマスは政治・社会思想家として、故ミシェル・フーコーとともに現代において最も影響力を及ぼしているといわれる[藤原ほか, 1987, 1頁]。会計学においてもフーコーの考えは多くの研究者によって会計理論に適用されている²⁾。しかしながら、ハーバマスの理論を適用している人は少ない³⁾。それゆえ、ロッホリンはハーバマス理論を広範に適用している点では稀有な存在であるといえよう。本稿は、日本ではほとんど知られることのなかったロッホリンの会計理論を紹介することを主たる目的としている。

ロッホリンの会計理論に限らず、ハーバマスやフーコー、それに社会学者のアンソニー・ギデンズなどの社会理論が会計理論に適用されてきているが、そうしたことの背景はいったい何であろうか。これについては、クーパー=ホッパーは「会計研究は多様な方法で発展している」として、「もちろん、見るということはどんな方法であれ、見ないということのひとつの方法でもある。旧来型の会計理論の沈黙と空隙——見えないもの——を探ろうとする研究が増えてきている」と述べて

いることが参考になる[Cooper and Hopper, 1987, p.407]。彼らが「旧来型の会計理論」と述べているのは、経済学や心理学を適用することが特徴となっており、会計を意思決定や契約観へと結び付けているものであるとしているところから、いわゆる実証主義的会計理論もこれに含まれると思われる。これに対して、「見えないもの」を探ろうとする研究は社会学や政治学を適用することが特徴となっているという。すなわち、これまでの会計理論では、ある面は見えるものの、その見方では見えないものは重要ではないとして語られることもなく、隙間へと追いやられてしまうのである。こうした、これまでの研究では「見えないもの」を見ようとする新たな試みが出現しているのである。そのひとつがロッホリンによるハーバマスの批判理論の適用であるといえよう。

これまでの研究では「見えないもの」を見る試みは、それゆえこれまでの研究に対して批判的になる場合が多い。先に挙げたクーパー=ホッパーの論文名「会計学における批判的な諸研究」における「批判的」という文字はこうした意味で使われている。それゆえ、ハーバマスの批判理論を直接指すわけではない。また、わが国で批判会計学といわれているマルクス主義的な会計理論も含まれるとみられるが、それと同じではない。要するに、これまでの研究では「見えなかった」ものを見ようとする試みがすべて「批判的な研究」と称されることになる。

以下では、批判理論を各種の理論とともにその方法論的・認識論的な位置付けをパーレル=モーガンの図式にしたがって説明し(2節)、次いで、ロッホリンにしたがって会計理論における機能主義の理論の批判と批判理論の意義を論じ(3節)、さらには、ハーバマス方法論、とりわけそのディスコース(討議)の理論の、ロッホリンによる展

開を眺め（4節）、最後に、会計と組織との関係の分析に対するハーバマスの社会理論の適用について取り上げる（5節）。

2 批判理論の位置付け

批判理論の方法論的・認識論的な位置付けを行なう前に、その考えを簡単に記しておくべきであろう。とはいえ、批判理論は「フランクフルト学派」と称される哲学者集団によって展開されたものであり、ホルクハイマー、ガーダマー、アドルノ、マルクーゼ、そしてハーバマスといった多くの人が参加している知的伝統でもある。それゆえ、それぞれの抱く批判理論を要約することも、またその前期と後期とで大きな転換を経たといわれるハーバマスの理論を要約することも困難なことであり。それでも、大雑把であれ、批判理論の考えを示しておこう。そのため、マッキントッシュの次の説明を挙げておきたい。

「それ〔批判理論〕は、大半の社会は「客観的な幻想」が充満していると論じる。こうした客観的な幻想はイデオロギーから生じるものであり、イデオロギーは個人や集団（すなわち、行為主体）がこれを創り出すことに、あるいは少なくとも、これを正当化することに参加しているが、後になって他者の作り物として扱うようになるものである。その結果、行為主体は自分で苦しむ妄想（すなわち、虚偽意識）や束縛された存在（すなわち、抑圧）に苦しむのである。批判理論が移行しようと思っている社会とは、行為主体が虚偽意識を免れ（すなわち、啓蒙され）、自ら課した抑圧から自由になる（すなわち、解放された）状態なのである。こうした移行は内省と自己反省をとおしてのみ起こりうる、と批判理論は主張するのである」〔Macintosh, 1990, pp.154-5〕。

こうしたことから、批判理論が社会の現状に対する批判を意図していることが明らかになる。しかし、批判理論はそうした批判だけではなく知の現状に対する批判をも意図しており、批判の2つの次元を内包しているのである〔木前, 1994, 46頁〕。ハーバマスも社会理論と社会との2つに

対する批判基準を提供しているとされるが〔ビュージ, 1993, 4頁〕、こうした点ではハーバマスも批判理論の伝統を受け継いでいるといえよう。ここにおける知の現状とは経験科学における科学主義・実証主義的な傾向を指している。ある意味でこうした批判の2つの次元を捉え、社会科学における諸理論を眺める視座を提供してくれるのがバーレル＝モーガンの分類図式である〔Burrell and Morgan, 1979〕。この分類図式はロツホリンをはじめ、多くの会計研究者に取り上げられているものである〔Chua, et al., 1981; Cooper 1983; Hopper and Powell, 1985; Roberts and Scapens, 1985; Chua, 1986; Laughlin and Lowe, 1990; Dillard, 1990; Armstorong, 1991〕。ハーバマスの批判理論の位置付けを知るためにも、この分類図式を検討することにしたい。

バーレル＝モーガンは組織に関する諸理論を分類するときに、「組織に関する理論はすべて、科学についての考えと社会についての理論に基づいている」〔Burrell and Morgan, 1979, p.1; 訳書, 3頁〕という考えを中心にすえている。彼らは、科学とりわけ社会科学の性質と社会の性質という2つの分析次元を取り上げ、その組合せで図1のような4つのパラダイム进行分类する〔Burrell and Morgan, 1979, p.22; 訳書, 28頁〕。

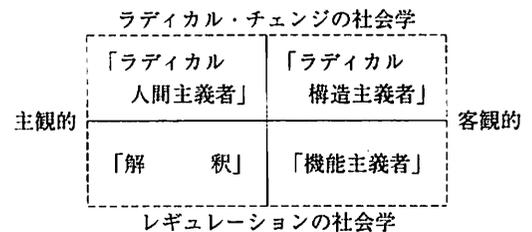


図1 社会理論を分析するための4つのパラダイム

「主観的」・「客観的」と述べられている次元は、社会科学の性質の違いを、あるいは社会科学に対するアプローチの違いを表わしている。これは社会学者がその主題にアプローチする際にとる、社会的世界とそれを研究する仕方についての仮定に関わるものである。そうした仮定として挙げられているのが、存在論、認識論、人間性、それに方法論という4つのものである。この4つの仮定について、主観的なアプローチと客観的なアプロ

チがとる立場の違いを表わしたものが図2の図式であり、以下でバーレル＝モーガンの説明にしたがって簡単に解説を施すことにしよう [Burrell and Morgan, 1979, chp.1]。

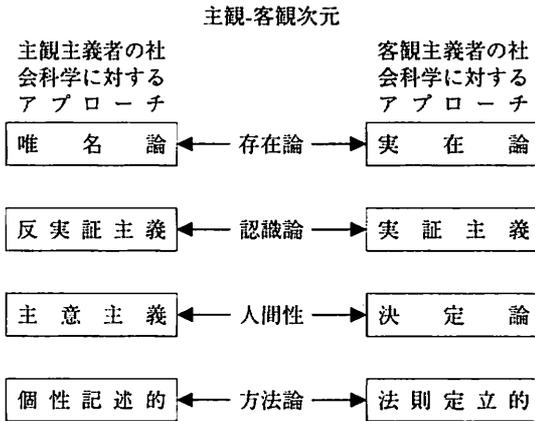


図2 社会科学の性質に関する仮定を分析するための図式

実在論 (realism) と唯名論 (nominalism) という存在論の区別は、研究対象である現実が個人の外部に存在しているか、個人の意識の所産として考えるかの違いである。社会科学の対象とする社会的世界は、唯名論では、そうした現実を構築するに用いられるコトバから構成されるにすぎないと考えられている。コトバとは独立の現実の構造が存在するとは考えられないのである。これに対して実在論では、こうしたコトバがなくても現実の構造は確固としたものとして存在するというのである。

実証主義 (positivism) と反実証主義 (anti-positivism) という認識論の区別は、どのような知識を得ることができるか、そうした知識の根拠を問うものである。社会科学における実証主義は、伝統的な自然科学と同様に、社会的世界において生じることを説明・予測するために、その構成要素間の規則性や因果関係を探究するというものである。反実証主義は、社会的世界における法則や規則性を探究することが有用であるという点については反対し、行為者の主体的な理解によって社会的世界を捉えようとするものである。

決定論 (determinism) と主意主義 (voluntarism) は人間性 (human nature) に関する区別であり、人間と環境との関係をどのように考える

かの違いである。これは特定の社会科学の理論において人間のモデルとしてどのようなものが反映されているかという問題である。決定論は、人間やその活動はその環境によって完全に決定されていると考える。これに対して主意主義は、人間は完全に自律的であり、自由意志をもっていると考ええる。

法則定立的 (nomothetic) な理論と個性記述的 (ideographic) な理論との区別は、知識を得る手法による違いである。個性記述的な理論は、研究対象である主題に関する直接的な知識を得ることによってのみ社会的世界を理解することができると考える。直接的な知識とは、状況の内側に入ったり、日常生活の流れに自ら関与することによって得られるような主観的な説明である。これに対して法則定立的な理論とは、自然科学でもちいられるアプローチや方法に典型的に見られるように、体系的な手続や手法に基づくことが大事であると考えるのである。

4つのパラダイムを作り上げる、もうひとつの次元は社会の性質に関する仮定に関わるものであった。これについても、バーレル＝モーガンの説明にしたがって簡単に解説することにしよう [Burrell and Morgan, 1979, chp.2]。

レギュレーションの社会学とは、社会に関する説明を与えることにおいて、その基礎にあるまとまりを強調する立場をとる。それは人間の事柄において規制 (regulation) の必要性に関心をもつ社会学であり、なぜ社会がひとつのまとまりがあるものとして維持されるかを理解する必要があるかを問うている。

これに対してラディカル・チェンジの社会学は、それが現代社会を特徴づけるものであると見ている根源的な変化 (radical change)、深層にある構造的なコンフリクト、支配の様式、ならびに構造的矛盾に対する説明を見つけることに主たる関心がある。それは、人類の発展を制限・阻害するような構造から人類を解放することに関わる社会学であり、人類の物質的・精神的な剥奪を問題にするのである。

こうした2つの対照的な社会学が関心をもつ重要な用語は次の表のように整理されている [Burrell and Morgan, 1979, p.18; 訳書, 23頁]。

なお、この表での「要求充足」という用語は、個人やシステムの要求を充足させることを意味しており、他方、「剥奪」は社会システムが人類の要求達成を阻害するという考えに基づいている。

表1 レギュレーション＝ラディカル・チェンジの次元

レギュレーションの社会学が関心をもつのは	ラディカル・チェンジの社会学が関心をもつのは
(a) 現状	(a) 根源的变化
(b) 社会秩序	(b) 構造的コンフリクト
(c) 合意	(c) 支配の様式
(d) 社会的統合とまとまり	(d) 矛盾
(e) 連帯	(e) 解放
(f) 要求充足	(f) 剥奪
(g) 現実性	(g) 可能性

バーレル＝モーガンは、こうして出来上がった4つのパラダイムを使って、社会学や組織論の主要な諸理論を分類するのである [Burrell and Morgan, 1979, pp.23ff; 訳書, 29頁以降]。その原著では図1と同じ分類図式が用いて分類・表示されているが、ここでは表の形式で示しておいた(表2)。

表2 分類図式による社会学と組織論の諸理論の分類

パラダイム	社会学の理論	組織論の理論
ラディカル人間主義者	フランス実存主義 無政府主義的個人主義 批判理論	反組織理論
解釈	現象学 現象学的社会学 解釈学	エスノメソドロジー と現象学的シンボリック相互作用論
機能主義者	相互作用論・社会的行為論 統合理論 社会システム論 客観主義	行為の準拠枠 多元論 官僚制逆機能の理論 社会システム論 客観主義
ラディカル構造主義者	現代地中海マルクス主義 コンフリクト理論 ソヴィエト社会理論	ラディカル組織理論

バーレル＝モーガンでは、2つの次元が座標軸のように扱われ、それぞれのパラダイムの中でこれらの諸理論が位置付けられている。すなわち、より主観的であるか客観的であるか、レギュレ-

ションとラディカル・チェンジのいずれの性質がより強く出ているかによって、上記の諸理論は各パラダイム内の適当なところに位置付けられるのである。表2では挙げなかったが、社会学の理論としての独我論が解釈パラダイムとラディカル人間主義のパラダイムにまたがった理論として、しかも主観・客観の軸では最も主観的なものとして位置付けられているのである。

バーレル＝モーガンはこのパラダイムの分類図式を、当初は、文献を体系化するための単なる分類方法であると見ていたが、分析手段として見るようになったという [Burrell and Morgan, 1979, p. x; 訳書, 6頁]。この分類図式を分析手段として扱うことによって、新たな探究領域へと目を向けることができるからである。それはいわば諸理論を展望する地図として「他の地図と同じように、自分がどこにいるのか、自分はどこにいたのか、そして将来どこへ行く可能性があるのかということをも明らかにする手段を提供してくれるのである」 [Burrell and Morgan, 1979, p.24; 訳書, 30頁]。こうした社会あるいは組織に関する諸理論の位置付けをしてくれるから、バーレル＝モーガンの分類図式が多くの会計研究者によって取り上げられてきたといえよう。

バーレル＝モーガンの分類図式は諸理論の位置付けを明らかにしてくれてはいるものの、どのパラダイムが優れているか、したがってどの理論が優れているかの判断基準を提供するものではない。バーレル＝モーガンによれば、4つのパラダイムは社会的な現実に関して代替的な見解を提供するものであり、この4つのすべてを理解することは社会に関する4つの異なった見解を理解するものであり、それゆえこれらを総合することは不可能なのである [Burrell and Morgan, 1979, p.25; 訳書, 31頁]。バーレル＝モーガンは、機能主義者のパラダイムに属する社会学と組織論の諸理論の説明に他の3つのパラダイムに属するものよりも多くの頁を当てている。それは、それぞれの分野でこれまで支配的であった理論の多くが機能主義者のパラダイムに該当するからにほかならない。また、他の3つのパラダイムに属する理論は、理論的なパースペクティブとしては十分に発展したのではなく、まだ発達初期段階にあるもので

あるという [Burrell and Morgan, 1979, p. 396]。それでも、支配的な機能主義者のパラダイムに対して、他のパラダイムの可能性を示すだけでもそのパラダイムに属する理論に対する「批判」の役割を演じることになると思われるのである。

ロツホリンを初めとして多くの会計研究者がバーレル＝モーガンの分類図式を利用するのは、会計理論においても機能主義者のパラダイムに属する理論が支配的であり、それに対して批判的な見方をするからにはかならない。例えばディラードは [Dillard, 1991]、マテシッチの理論を機能主義の例として、テンカーのマルクス主義的な理論をラディカル構造主義の例として挙げ、現在の批判的な会計研究の多くが多少なりともラディカル構造主義の立場を採用していると説く。ディラード自身がとる「批判的社会科学としての会計学」は、批判的社会科学が批判理論をもとにしているところからラディカル人間主義に位置付けられているが、その具体的な展開はなされていないといえよう。また、アームストロングは会計学に適用されているエイジェンシー理論が機能主義的であると、それに代わる新たなエイジェンシー理論を構築しようとしている [Armstrong, 1991]。ロツホリンによる機能主義の批判と批判理論の主張については次節で述べることにしたい。

しかしながら、こうしたバーレル＝モーガンの分類図式に問題がないわけではない。そうした問題点をチュアが挙げているので、それを紹介しておきたい [Chua, 1986, p. 603]。

- (a) 決定論と主意主義などのように相互排他的な2分法を使っていること。
- (b) パラダイムの提唱者であるクーンが非合理的なパラダイム選択を勧めていると誤解していること。
- (c) 真理と理性について暗に相対主義を採用していること。
- (d) ラディカル人間主義とラディカル構造主義との区別が疑わしいこと。

こうした問題点にもかかわらず、バーレル＝モーガンの分類図式がヒューリスティックな価値があることは認めることができよう [Laughlin and Lowe, 1990, p. 22]。

3 機能主義に対する批判

ロツホリンが批判理論を指向するのは、基本的には、本稿の最初に取り上げたクーパー＝ホッパーが言うように、旧来型の会計理論では見えないものを見ようとするからといえよう。ロツホリン＝ロウ⁵¹の論文「会計に関する諸思考の批判的分析——会計システム設計を理解・変革するための展望」[Laughlin and Lowe, 1990, p. 15]の最初に、ホップウッドの次の言葉が引用されている。すなわち「われわれは組織における会計システムの実際の働きについていかに知らないか」[Hopwood, 1979, p. 145]という、嘆きにも似た言葉である。こうした無知は、ロツホリン＝ロウによれば、これまでの会計理論が組織や社会に関する不適当な理論の下にあり、また存在論・認識論・方法論からみて不適当な仮定に基づいていたからであり、それによって組織における会計システムの働きについて片寄った分析を行なってきたからであるという [Laughlin and Lowe, 1990, p. 16]。ここで使われている用語から理解されるように、ロツホリン＝ロウは、これまでの会計理論がモーガン＝バーレルの分類図式でいう機能主義のパラダイムに属しており、それゆえ見えない、無知の領域が作られてきたと考えているのである。彼らはそうした機能主義的な会計理論に対する代替案として批判理論を取り上げるのであるが、しばらくは彼らの説くところにしたがって会計理論における機能主義について考えてみよう。

ロツホリン＝ロウは、組織論や会計理論のほとんどが機能主義のパラダイムに属するとみて、それらの理論をバーレル＝モーガンの2つの座標軸で位置付けを行なおうとする。すなわち、機能主義の理論であっても、主観と客観のいずれの極に近いか、またレギュレーションの社会学とラディカル・チェンジの社会学のいずれの極に近いかで分類しようとするのである。そのためロツホリン＝ロウは、組織論や会計理論の諸理論を直接バーレル＝モーガンの分類図式に位置付けるのではなく、組織論の研究者であるスコット (W. R. Scott) による分類図式を媒介にしている。スコットは組織論の諸理論が抱く組織についてのモデルを2つの次元に分けて分類する。すなわち、モデルが

「合理的」か「自然的」という次元と、システムとして「オープン」か「クローズド」という次元である。そして、図3に示されるような図を提示している [Laughlin and Lowe, 1990, p.26]。各分類に示されている名称は、組織モデルの「イメージ」であるといえよう。

	クローズド・システム・モデル	オープン・システム・モデル
合理的モデル	1900-1930 科学的・管理的機械	1960-1970? システムとサイバネテックス的概念
自然的モデル	1930-1960 人間関係の場	1970- 曖昧で、複雑で、葛藤する現象

図3 スコットによる組織モデルの図式⁸⁾

ここでは各部分の年代が示すように、組織モデルが「合理的・クローズド・モデル」から「自然的・クローズド・モデル」「合理的・オープン・システム」を経て「自然的・オープン・システム」へと移行してきたことが理解されよう。

ロツホリン=ロウは、スコットのいう「合理的」「自然的」「オープン」「クローズド」の概念を検討し、それらがパーレル=モーガンの主観・客観の次元に属するものであることを明らかにし、さらにはスコットが社会の本質に関する仮定を無視していることを指摘する [Laughlin and Lowe, 1990, pp.26-7]。そこで彼らはスコットの諸概念を分析して、図4に示すように、パーレル=モーガンの分類図式の機能主義者のパラダイムに4つの組織モデルを位置付けている。

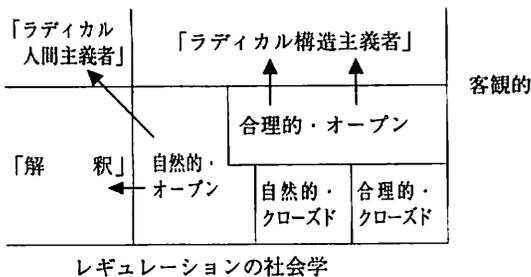


図4 スコットの組織モデルの位置付け⁷⁾

図4に見るように、「合理的・クローズド・モデル」が客観とレギュレーションの社会学の最右翼に属しており、「自然的・クローズド・モデル」がそれよりも主観的であり、「合理的・オープン・システム」がその両者よりもラディカル・チェンジの社会学に近いものであり、また「自然的・オープン・システム」はこれらよりも主観性の強いものであることが示されている。後の2つのモデルから他の3つのパラダイムの方向に矢印が出ているが、これはそれらのモデルが機能主義のパラダイムから他のパラダイムへと移行する可能性を示したものである。

ロツホリン=ロウは、財務会計と管理会計の諸研究も組織論と同様に、スコットの分類図式の中に分類できるとして、それらの諸研究を図5のように位置付けている [Laughlin and Lowe, 1990, p.29]。なお、図5では会計に関する諸理論はコードによって示されており、その説明は表3に示している⁸⁾。

	クローズド・システム・モデル	オープン・システム・モデル
合理的モデル	MQ11 FH1	FH2 MQ22 MQ31 FC1 MQ32 FC3 MQ33 FC2
低い	MQ21/ FE1	FE2 F11/ F13 MQ34 MB32
自然的モデル	MB11 F12	MB12 F14 MB21 MB31 MB41
	MB22 F15	

図5 スコットの分類図式における会計の諸研究

表3 会計の諸研究のコード

財務会計	管理会計
FH1 歴史的原価会計	MQ11 原価計算
FH2 事象理論	MQ21 伝統的な知恵
FE1 所得と価値の測定	MQ22 不確実性モデル
FE2 インフレーション会計	MQ31 情報経済学
F11 意思決定モデルのための情報	MQ32 ゲームの理論
F12 行動会計研究	MQ33 エイジェンシー理論
F13 証券価格研究	MQ34 取引コスト理論
F14 人間情報処理	MB11 会計システム設計が人におよぼす影響
F15 情報誘導	MB12 人間情報処理
FC1 情報経済学	MB21 人が会計システム設計におよぼす影響
FC2 エイジェンシー理論	MB22 情報誘導
FC3 社会的厚生論	MB31 組織の諸面が会計システム設計におよぼす影響
	MB32 コンテンジェンシー理論
	MB41 あらゆる諸面が会計システム設計におよぼす影響

図5を図4に、さらにはバーレル＝モーガンの分類図式に重ねて考えれば、他のパラダイムに近い研究も存在するが、会計の諸研究の多くが機能主義のパラダイムに属していることが分かるであろう。ロッホリン＝ロウはそうした機能主義のパラダイムを超える必要性を唱えるのである。

機能主義のパラダイムを超える必要性を理解するには、そのパラダイムでは見えなかったもの、知られなかったものを知ることが糸口となる。それはロッホリン＝ロウも引用しているパーチェル＝クラブ＝ホップウッドの次の文章によって示されよう。

「・・・会計の技術的な実践がどのようにして社会的なるもの (the social) につながっているか、広範な社会的要因がどのようにして会計に影響し変化させるか、また会計それ自体がどのようにして社会的なるものの領域で機能し、それに単に反応するだけでなくそれに影響しているか、といったことについてはほとんど知られていないのである」 [Burchell, Clubb and Hopwood, 1985, p.382]。

ロッホリン＝ロウによれば、機能主義的な思考は会計の技術的なものとその社会的なコンテクストとの関係の研究を、容易に観察できる性質をもつ要素に限定してきたのであり、会計システムを

理解・設計するに重要な役割を演じる社会的な要因を排除してきたのである [Laughlin and Lowe, 1990, p.35]。容易に観察できる性質に限定するのは機能主義の客観的な仮定の表われである。こうした機能主義の思考によって、これまでの会計研究者や実務家は会計システム設計についてきわめてテクノクラットの狭い理解をもって活動してきており、結果として現在の社会秩序を維持するものとなっているというのである [Laughlin and Lowe, 1990, p.33]。

こうした機能主義から離れ、会計システムを社会・組織・個人の要因との関連で研究する人が増えてきており、こうした人々は機能主義的な思考に反対する点では一致しているという [Laughlin and Lowe, 1990, pp.34-6]。機能主義から離脱するといっても、バーレル＝モーガンの分類図式から理解されるように、他に3つのパラダイムがあり、離脱する人がよってたつ理論は様々である。そのなかでもロッホリン＝ロウが選ぶのはラディカル人間主義のパラダイムである。その理由を彼らは「会計システムは組織の行為者が創り出す社会的な構築物であり、組織の行為者はその設計を変え、またその設計に導く意味を暗に与える自由をもっている」からであるとして、さらに「会計システムやその設計者は積極的に参画すべき事柄として、それらが一部分となっている組織や社会の現状を批判的に分析するとともに、われわれの

社会的生活における解放と発展を追求するにそれらがどのような変化をもたらさうかを調べることもある」と論じている [Laughlin and Lowe, 1990, p.37]。次の2つの節では、こうしたラディカル人間主義のパラダイム、より具体的に言えばハーバマスの批判理論、を採用するロッホリンの議論をみてゆくことにする。

[未完]

注

- 1) 「Laughlin」の発音は、日本語の表記としては「ロッホリン」とするのが近い。彼のルーツはアイルランドにあるとのことである。
- 2) フーコーに言及した日本語の文献としては、岡野 [1991] と國部 [1991] とがある。また、*Critical Perspectives on Accounting* 誌が1994年にフーコーの特集号をもったほどである。
- 3) 私の知る限りでは、かつてシェフィールド大学にいて、ロッホリン等とともにハーバマスを研究したというバクステイの論文があるだけである [Puxty, 1991; Arrington and Puxty, 1991]。バクステイ単独の論文はハーバマスの普遍語用論を、アリントンとの協同論文はそのコミュニケーション行為の理論を適用したものである。他にハーバマスの理論とは限らないが批判理論を適用したものとしては、マッキントッシュ [Macintosh, 1990] とデillard [Dillard, 1991] がある。
- 4) ハーバマスがフランクフルト学派の後継者であるとも、そうではないともいわれる。ハーバマスの批判理論がそれまでの批判理論とは大きく異なっていることを示すものであろう。こうした点については、ピュージ [1993] や藤原ほか [1987] を参照されたい。
- 5) ロウもかつてシェフィールド大学に在籍し、ロッホリンやバクステイらとともにハーバマスを研究した人物である。
- 6) 原図では各パラダイムにおける基本的な文献が示されているが、ここでは省略した。
- 7) 他のパラダイムを表示するために、原図に加筆している。
- 8) このコードに使われるアルファベットは次のようになっている。最初の F と M は財務 (Financial)

会計と管理 (Management) 会計を示す。財務会計の分野での2番目のアルファベットは「歴史的記録 (Historical record)」「現在の経済的現実 (current Economic reality)」「情報システム (Information system)」「経済財 (economic Commodity)」の中の英文の大文字を使って、それらに属する研究であることを示している。なお、これはデービスら [Davis, Menon and Morgan, 1982] が挙げる会計についての4つのイメージを採用したものである。管理会計の分野での Q と B はそれぞれ「数値的 (quantitative)」と「行動的 (behavioural)」を指す。なお、デービスらの会計イメージを扱ったものとして酒巻 [1992] がある。

文献

- 岡野浩 (1991) 「会計史と方法」『経営研究』(大阪市立大学) 第41巻第5・6号。
- 木前利秋 (1994) 「批判理論と知の可能性」新田義弘ほか編『現代思想8 批判理論』岩波書店。
- 國部克彦 (1991) 「現代思想と会計研究」『経営研究』(大阪市立大学) 第41巻第5・6号。
- M. ピュージ (1993) 『ユルゲン・ハーバマス』山本啓訳、岩波書店。
- 酒巻政章 (1992) 「会計実践と会計規範」全在紋・永野則雄編著『現代会計の視界』中央経済社。
- 藤原保信・三島憲一・木前利秋編著 (1987) 『ハーバマスと現代』新評論。
- Armstrong, Peter (1991), *Contradiction and Social Dynamics in the Capitalist Agency Relationship, Accounting, Organizations and Society*, Vol.16, No.1.
- Arrington, C. Edward and Anthony G. Puxty (1991), *Accounting, Interests and Rationality: A Communicative Relation, Critical Perspectives on Accounting*, Vol.2.
- Burchell, S., C. Clubb and A. J. Hopwood (1985), *Accounting in its Social Context: Towards a History of Value Added in the United Kingdom, Accounting, Organizations and Society*, Vol.10, No.4.
- Burrell, Gibson and Gareth Morgan (1979),

- Sociological Paradigms and Organisational Analysis*, Hampshire, England : Arena.
- 【組織理論のパラダイム】鎌田伸一・金井一頼・野中郁次郎訳, 千倉書房, 1986年。これは原書の前半部分だけの訳である。なお, 本稿で引用した訳文は部分的に変更しているところもある。
- Chua, Wai Fong (1986), Radical Developments in Accounting Thought, *The Accounting Review*, Vol.61, No. 4.
- Chua, W. F., R. C. Laughlin, E. A. Lowe and A. G. Puxty (1981), *Four Perspectives on Accounting Methodology*, Discussion Paper, The University of Sheffield.
- Cooper, D. (1983), Tidiness, Muddle and Things : Commonalities and Divergencies in Two Approaches to Management Accounting Systems, *Accounting, Organizations and Society*, Vol.8, No. 2/3.
- Cooper, David J. and Trevor M. Hopper (1987), Critical Studies in Accounting, *Accounting, Organizations and Society*, Vol.12, No.5.
- Cooper, David J. and Trevor M. Hopper (eds.) (1990), *Critical Accounts*, London:Macmillan.
- Davis, S. W., K. Menon and G. Morgan (1982), The Images that have Shaped Accounting Theory, *Accounting, Organizations and Society*, Vol.7, No.4.
- Dillard, Jesse F. (1991), Accounting as a Critical Social Science, *Accounting, Auditing & Accountability Journal*, Vol.4, No.1.
- Hopper, T. and A. Powell (1985), Making Sense of Research into the Organizational and Social Aspects of Management Accounting: A Review of Its Underlying Assumptions, *Journal of Management Studies*, Vol.22, No.5.
- Hopwood, Anthony G. (1979), Editorial, *Accounting, Organizations and Society*, Vol.4, No.3.
- Laughlin, Richard C. and E. Anthony Lowe (1990), A Critical Analysis of Accounting Thoughts : Prognosis and Prospects for Understanding and Changing Accounting Systems Design, in Cooper and Hopper (1990).
- Macintosh, Norman B. (1990), Annual Reports in an Ideological Role : A Critical Theory Analysis, in Cooper and Hopper (1990).
- Power, Michael and Richard Laughlin (1992), Critical Theory and Accounting, in M. Alve-sson and H. Willmott (eds.), *Critical Management Studies*, London; Sage.
- Puxty, Anthony G. (1991), Social Accountability and Universal Pragmatics, *Advances in Public Interest Accounting*, Vol.4.
- Roberts, J. and R. Scapens (1985), Accounting Systems and Systems of Accountability- Understanding Accounting Practices in Their Organizational Contexts, *Accounting, Organizations and Society*, Vol.10, No.4.